

 労働連だより

田嶋 康利

11月7、8日に福岡で開催された「生活困窮者自立支援全国研究交流大会」に困窮者支援全国ネット理事の一員として参加した。前夜祭での村木厚子前厚生労働事務次官の話の最後に「仕事を通して一人ひとりが成長し、それを通して社会が成長する」と話され、まさに、「よい仕事」を通して一人ひとりが人間的に成長するという協同労働の働き方と大いに重なるものではないか、と前夜祭閉会の挨拶で話す機会をいただいた。

いま、生活困窮者自立支援制度の就労訓練事業(中間的就労)のあり方を巡って様々な取り組みが開始されている。研究交流大会2日目第4会「中間的就労とは何か? 就労訓練(中間的就労)」における討論の中で、中間的就労のあり方をどう捉えるのか、議論を通して中間的就労のあり方について、いくつかの意見が示された。それは、①企業(特に中小零細企業)や社会福祉法人等の人材確保(労働力の確保)の手段としての労働形態として位置づけるのか、それとも②市民として、その持つ力を自らの成長と合わせて地域社会をより良くするために発揮する働き方として位置づけるのか、である。あらためて、中間的就労の幅広さを実感すると共に、「人が働く」ことはどういうことか、その意味を問うことになったように思う。

センター事業団沖繩事業所では、元ホームレスからワーカーズコープで就労体験し、今では労協ブランド清掃方式をマス

ター、現場のよい仕事の先頭に立っている仲間の声が届けられている。『私がなぜ労協の一員で頑張れるのかということ、この団体は、弱い者の痛みを自分の痛みとして受け入れ、また弱い者に対しての目線が一緒であること。その姿勢が感じ取れるから頑張れます。しかし、まだ世間の差別的な視線の中で路上生活を強いられている、また、いろんな事情で弱い立場に立たされ、重圧を強いられている人がいます。その現状を私は訴え続けなければいけない責任を持っています。先の大戦で私は、私よりもっと苦しい体験をしてきた人たちの語り部をしています。沖繩戦、広島、長崎での原爆被害、その後の差別と偏見の中で必死に生きてきた方の語り部をしていると、本当の平和とは何か、弱い者を出さない世の中にするにはどうすべきか、どう行動すべきか考え、動き始めています。原発問題、災害、復興など各地で起きている様々な問題は、一人一人が考え、打開策を見出さなくてはいけない。だから働くものが協力し合う協同体、ワーカーズコープが出来たのだと思う。当たり前の生活が出来ずに孤独に陥っている者に対し、一人一人が何をするのか何ができるのかが求められているのだと思う。沖繩事業所を通じて、はたらく場所、居場所をつくっていき沖繩エリアでは、子ども食堂、はたらく場づくり、学習支援等、皆で知恵を出し合い、仲間の手を大事にし、行動していきます』(沖繩通信(仮)2015年11

月9日)と。

「共に働く」現場が全国に広がっており、その広がりや、私たちに協同労働の新たな可能性を示してくれる。「共に働く」協同労働の実践は、自立支援制度では「就労訓練事業」(中間的就労)に相当するが、それは決して「一般就労」(雇用労働)への段階的就労ではあり得ない。それは「分けへだてなく誰もが集え、安心できる居場所」であり、「共に働く」中で仲間としての連帯性を強め、協同との関係性や信頼関係を深め、その持てる力や可能性を最大限発揮することで人間的にも成長することができる就労現場となっている。この取組みは、働く現場などさまざまな場面で排除され、主体性を奪われた人びとが、「共に働く」ことで社会に参加し、主体性と人間の誇りを取り戻していく協同の実践にほかならない。

私案であるが、協同労働による「中間的就労」を整理すると、

(1) 企業(事業体)の持続的発展のための「人材」確保(養成)ではなく、困難にあるが主体者となり共に働くことで成長を促す労働であること。

(2) 一般就労(雇用労働)へのステップアップ型(段階型)の就労ではなく、持続的な就労であること。「イタリア(社会的協同組合B型)やイギリス(ソーシャル・ファーム)では、『不利な立場の人びとへの雇用機会の提供』を第一目標としている—すなわち、一般就労に向かうための訓練ではなく、そこで長く働き続けることが想定されている—ためである」(『『中間的就労』のあり方

を考える—イタリア、イギリスの事例を参考に—」、福田志織、みずほ情報総研レポートvol.9、2015)。

(3) 支え合う力(自立)—職場の福祉力・包摂力の向上を促し、より良く働く「よい仕事」をめざす労働であること。

(4) 「共に働く・共に生きる・地域をつくる」ことを一体的に捉えて、働く場としての居場所をつくり出すことで、地域社会のより良いあり方を提起、社会に協同と連帯を広げていく労働であること—成長経済に対抗する新しい経済として「コミュニティ経済」(持続可能な地域社会を支える経済)を市場経済の中につくり出す。社会連帯経営によって、当事者主体による仕事おこし・まちづくりを市民の連帯で広げ、「分けへだてなく誰もが集え、安心できる居場所」を創り出し、排除しない地域、困窮を生み出さない地域社会をめざす。

の4つであろうか。

「毎日生きているが息苦しい。いろんなルールがあって、外れたり乗れたりできればいいのに。世の中で多様な生き方と言われている割には確固としたルールがあって、少し外れただけで大体の人は戻れない。というか、社会が戻してくれない。もっとちょっと柔軟にならないのかなって思うんです」(特集「絶望の非正規」、週刊東洋経済、2015年10月17日号)と、現在の雇用労働の現状を東北地方で両親と同居する40代女性が語る。

いまから半世紀前に、吉野源三郎がその著書「君たちはどう生きるか」(ポプラ社版)

で以下のように本の扉に書いた。「だれもかれもが力いっぱいにのびのびと生きてゆける世の中／だれもかれも『生まれて来てよかった』と思えるような世の中／じぶんを大切にすることが同時にひとを大切にすることになる世の中／そういう世の中を来させる仕事がきみたちの行くてにまっている／大きな大きな仕事、生きがいのある仕事」と。

生きがい・働きがいある仕事をどう創り出していくのか、現在、大高研道教授(聖学院大学、協同総研常任理事)と「中間的

就労と協同労働」研究会を定期開催し、「共に働く」協同労働の可能性について調査研究を行っている。

協同労働が、「共に生きる・地域をつくる」よい仕事を通してより良い社会の創造をめざす働き方であることの意義や意味を深めていきたいと思う。2016年2月27、28日には、協同総研の会員研究者の皆さんにご協力いただき、労協連合会の主催で「全国よい仕事研究交流集会2016」を都内(初日：ニッショーホール、2日目：明治大学)で開催する。ぜひ、ご参加頂ければと思う。